

# 平成 29 年度 第 3 回 木材需給会議 資料の概要 (案)

## 1. 一般経済の動向 (資料 1)

2017 年度の実質 GDP 成長率は、前年比+1.7%と 3 年連続でプラス成長となることが見込まれる。ただし、設備投資、輸出の増加基調が維持される一方で、住宅投資、公共投資の減少が続き、個人消費の回復テンポも鈍いため、持ち直しペースは緩やかにとどまる。

2018 年度も景気の回復は続き、実質 GDP 成長率は前年比+1.1%と 4 年連続でプラス成長を達成すると思われ、オリンピックを控えたインフラ建設などの需要の盛り上がりや、首都圏での再開発案件の増加などが景気の押し上げ要因となる。また、海外経済の回復の継続を受けて輸出の増加が続くほか、設備投資は企業業績の拡大を背景に人手不足への対応のための投資や、研究開発投資の増加が続くと予想され、個人消費も底堅さは維持できる見込みである。

2019 年度は、予定通り 10 月に消費税率が 10%に引き上げられると想定しているが、引き上げ幅が 2%と小幅であり、一部に軽減税率が適用されるため、駆け込み需要・反動減とも前回と比べて小規模にとどまる。また、翌年にオリンピックを控えていること、雇用情勢の改善が続くこともあって、消費者マインドの悪化も一時的にとどまり、実質 GDP 成長率は前年比+0.9%とプラスを維持すると思われる。

## 2. 住宅着工見通し (資料 2)

2017 年 7-9 月期の住宅着工は 24.7 万戸、着工の牽引役であった貸家や持家の減少によって、前年同期比 2.4%減となった。

貸家減速の背景としては、相続税対策による需要は根強いと考えられるが、空室率上昇や資金供給面での新規貸出の減少など調整要因が挙げられる。

直近 10 月の住宅着工は、季節調整済年率換算値 (瞬間風速) 93.3 万戸で 2016 年度実績を 4%程下回る水準となっており、これまで牽引役であった貸家が減少に転じ、6 月以降は持家と共に 5 か月連続で前年同月割れとなっている。

住宅着工を取り巻く環境は、超低金利による住宅取得能力の引き上げ効果はあるものの、建設資材や労務費等のコスト上昇、地政学リスクなど不安材料が漂う中で、着工の足取りは徐々に重くなっている様相がうかがえる。

民間シンクタンク等による住宅着工予測では、2016 年度実績を若干下回る 96.0 万戸程との見方が主流であった (GDP 7-9 月期一次速報公表後)。

## 3. 住宅業界の動向 (資料 3)

住団連が実施した住宅会社の「支店、営業所の営業責任者に対する住宅業況調査」の結果は、戸建注文住宅では H29 年度第 2 四半期の受注実績は、第 1 四半期に対し+10 ポイント、金額でも+4 ポイントと棟数、金額ともに再度プラスに転じた。

また、住団連の「低層住宅に関する経営者の景況感調査」では、対前年比の総受注戸数は、-32 ポイント、金額でも-23 ポイントと、戸数では 6 四半期連続、金額でも 3 四半期連続のマイナスとなった。

これに対するコメントとしては、「日経平均の上昇に伴い、高額物件の受注が増えている。」との一方で、「市場環境は第 1 四半期と大きな変化は無かった。お客様の様子見傾向が強く商談に時間がかかる傾向」と、決め手の欠如と商談の長期化が継続との指摘も多い。

住友林業の 11 月度の戸建住宅の受注は、対前年比+4%とやや改善。11 月の販促イベントにより 12 月の受注増が期待されるが、年末・年始を迎え、現状が継続とも推測される。

## 4. 木材業界の動向 (資料 4)

平成 29 年 9 月~11 月分の販売量、仕入量については、流通部門、製造部門ともに増加となった。販売

価格については、流通部門、製造部門ともに前月並の価格となっているが、仕入価格の動きについては、流通部門、製造部門ともに、上昇している。

12月以降の販売量、仕入量の動きに関して、流通部門においては増加の見通し、製造部門においては、前月並からやや減少の動きが見られ始めている。販売価格、仕入価格については、流通部門でやや強含み、製造部門では強含みの見通し。

3ヶ月後の相場予測については、米材、南洋材、北洋材（欧州材を含む）は、流通部門、製造部門共に強含み予想となっており、国産材は、流通部門でやや強含み、製造部門では強含み予想となっている。

プレカットの動向については、流通部門、製造部門ともに、落ち着いた動きが継続している。

## 5. 木質バイオマスの動向（資料5）

木質バイオマスエネルギー利用動向調査における、エネルギーとして利用された木材チップ、木質ペレットのうち間伐材・林地残材等に由来するものの量の推移（丸太換算量）では、平成27年の確定数値と平成28年速報値を比較すると、木材チップで260万m<sup>3</sup>から420万m<sup>3</sup>と1.6倍となっている。

FIT制度による稼働木質バイオマス発電所の四半期別燃料使用量のうち、未利用材の燃料利用の第1四半期の対前年度比較の伸び率は7%、第2四半期比較で21%、一般木材では、第1四半期比較で11%、第2四半期比較で29%となっており、今後も新規稼働の増加によってさらに伸びると見込んでいる。

調達価格等算定委員会では、認定状況等のデータを取りまとめており、2017年3月末時点の一般木材等を利用したバイオマス発電設備（1,147万kw）FIT認定量の規模別内訳は、件数では、2,000kw未満の間伐材等に由来する未利用材を利用するものが80強で最も多いが容量としては少なく、5万kw～6万kw未満の一般木材等を利用するものが60強の件数で、容量も3,000,000kwを大きく超えていることが問題となった。これは、一般木材・農作物残さの中には、製材端材等が含まれるものの、PKS（ヤシガラ）やパームオイルを燃料とするもの、あるいは輸入木材を燃料とするものが大半である。

## 6. 木材輸出の動向（資料6）

本年1月から10月までの輸出数量は、丸太は79万6千m<sup>3</sup>で前年比51%の増、製材は10万8千m<sup>3</sup>で59%の増、合板は9万5千m<sup>3</sup>で21%の増となった。

輸出総額は266億円で、前年比39%の増となった。国別には、中国が64%の増で118億円、第2位のフィリピンは36%の増で60億円、第3位の韓国は19%の増で31億円となっており、上位国への輸出は引き続き好調であり、第4位は前年比42%増の米国となっている。

## 7. 紙パルプ産業の需給動向（資料7）

紙・板紙の国内出荷は、紙で前年比マイナス、板紙で前年比プラスの傾向が続いている。紙では印刷情報用紙をはじめ主要品種全てでマイナス、板紙では通販向け段ボール原紙の需要好調が目立つが加工食品、電化製品向けも堅調に伸びておりプラスを維持している。また、中国では環境問題から古紙の輸入ライセンスの発給が滞っているため、日本からの中国向け古紙輸出が低迷しており、その影響から板紙（段ボール原紙）の輸出が大幅に伸びている。

パルプ材の集荷は針葉樹でマイナス、広葉樹で微増となった。国産材の約7割を占める針葉樹は、住宅着工量の好調から残材チップの出材量が堅調に推移していることを受け前年比プラスとなったが、輸入材は国産材に押される形でマイナスとなっている。広葉樹は、国産材では労働者不足等からマイナス傾向が続いており、輸入材は紙の主力品種の慢性的な需要減少の傾向から伸び悩んでいる。

## 8. 国産材に関する動向（資料8）

11月上旬の森連共販平均価格は、スギ柱用材が前月比m<sup>3</sup>当り400円高の12,100円、同中目材は前月比m<sup>3</sup>当り200円高の12,200円。ヒノキ柱用材が前月比m<sup>3</sup>当り800円高の15,900円、同中目材は前月比m<sup>3</sup>当り600円高の15,700円となった。

10月の原木販売量は、台風等の影響により雨が続き、全国的にスギ・ヒノキの出材量が減少した。

原木価格は、製材業者の原木不足が続いており、柱用材及び中目材の引き合いが強く、原木価格は強含みに推移した。特に柱用材の品薄感が強く、スギ・ヒノキ共に柱用材の買い意欲は旺盛である。

製品荷動きは、大手住宅メーカー向け資材は堅調である一方、地場工務店向け住宅資材は鈍い状況が続いている。

11月は好天に恵まれ徐々に出材量は増加しているが、製材工場の原木在庫が少ないため、早急に相場が緩むことはなく、12月の降雪によって原木不足に拍車が掛かれば、更なる相場の上昇が予想される。

## 9. 国産材丸太（製材用）の動向（資料10 - P1）

平成29年第3四半期の実績は、前回予測よりも増加したものの、前年同期比で減少。

第4四半期の見込みは、8-9月に見られた夏季の豪雨による出材量の減少は、11月にはほぼ回復してきており、現在ではほぼ例年通りの出材が見込まれているため、前回予測より増加の見込み。

平成30年第1四半期及び第2四半期の見通しは、特に加工部門で引続き好調が継続する見方と若干減少気味で推移するという見方が分かれている状況であり、前年同期比で減少の見通し。

外材の価格上昇がみられる中、需要は堅調で国産材についても原木の価格上昇がみられたが、必ずしも製品価格に反映されているとは言えない状態である。しかし、11月までの需要については加工部門で過剰気味との見方もあり、今後、出材が安定してくれば価格についても落ち着くのではないかと思われる。住宅等の需要については、夏以降、対前年割れが続いており、特にアパートローンを巡る状況等厳しい見方もある。

## 10. 国産材丸太（合板用）の動向（資料10 - P1）

平成29年第3四半期の実績は、堅調な住宅着工（特に構造用合板の需要増大）、国産材合板へのシフトの促進、輸入合板の減少、フロア合板等への国産合板の需要増大、南洋材合板等に関する違法伐採等の環境問題、国内合板工場のフル稼働、合板工場の設備投資による生産能力・効率のアップ等により前年同期比で増加した。

第4四半期の見込みは、前期要因により前年同期比で増加の見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、前期要因に加え、新設の合板工場の稼働準備等により、前年同期比で増加の見通し。

第2四半期の見通しは、前期要因により、前年同期比で増加の見通し。

## 11. 米材丸太 需要動向（資料10 - P2）

平成29年第3四半期の実績は、前年同期比で減少となった。本来は需給ともに旺盛な時期であるが、今年は北米産地でのファイヤークロージャー（山火事による伐採規制）が異常なまでに深刻で、入荷（供給）量が第2四半期同様、大幅に減少したことにより需要も減った面が大きい。

第4四半期の見込みは、前年同期と同程度と見込まれるが、北米産地での異常気象（西海岸山火事）による原木供給減は深刻で、産地価格は急上昇中であり、入荷が減少するため、国内での原木需給はかなりタイト感が出てきている。

平成30年第1四半期の見通しは、前年同期比で減少の見通しであるが、比較的旺盛な需要は続くと思われる。北米産地の原木伐採減産を受けて産地の先高観は続くが、国内製材需要は堅調に推移する見込み。この間、原木・製品価格共に5-10%のコスト転嫁の値上げが見込まれる。

第2四半期の見通しは、産地出材も回復し、供給はやや増え、価格も高値ではあるが落ち着き、需給は比較的バランスが取れて来ると予想され、前年同期とほぼ同程度の見通し。

## 12. 米材製材品 需要動向（資料10 - P2）

平成29年第3四半期の実績は、現地の伐採量が少なく入荷も少なかったため、前回予想より減少とな

った。山火事による入山制限（ファイヤークロージャー）の影響もあり、入荷の大幅増は期待できない。

第4四半期の見込みは、前期の入荷減で慌てて買いに回っている商社もあり、前回予想並みの見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、冬場にもかかわらずアメリカ西部の山火事は続いており、現地の製材工場も丸太の手当てに苦労している。またアメリカ国内の需要も活発であることから日本に回す材は無い状態であり、前期より数量は減少の見通し。

第2四半期の見通しは、前年同期比で減少の見通し。伐採量は回復すると思われるが、アメリカ国内の活発な需要は引き続き衰えることはないと思われ、日本が買いづらい状況は続くものと思われる。

### 13. 北洋材丸太 需要動向 （資料10 - P4）

平成29年第3四半期の実績は、製材品の価格も強含みとなり、需要増が期待されたが、丸太入荷が少なく前年同期比で減少となった。

第4四半期の見込みは、前期に続き丸太の入荷が難しい状況が続くため、低水準の需要が予測され、前年同期比で減少の見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、丸太の入荷が季節的に回復することから、需要は増加すると予測されるが、前年同期比で減少の見通し。

第2四半期の見通しは、前期要因のとおり、前期より増加するが、前年同期比で減少の見通し。

### 14. ニュージーランド・チリ材 需要動向 （資料10 - P5）

#### (1) ニュージーランド・チリ材丸太 需要について

平成29年第3四半期の実績は、夏場の低需要期ではあるが、チリ材製品の入荷遅れにより9月以降内地製材工場へ注文が流れたことが原木の消費増に寄与し、前年同期比で増加した。

第4四半期の見込みは、輸出が前年比10%強で伸びており梱包需要を牽引、内地挽き工場の原木需要を押し上げており、前回予測より増加の見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、繁忙期のため、10万m<sup>3</sup>程度の需要は継続できるが、1月以降NZ松原木を使った内地挽き製品価格が3,000円/m<sup>3</sup>の値上げとなり、需要の一部は安価な国産スギ梱包材に流れると予測され、前年同期比で減少の見通し。

第2四半期の見通しは、決算後の低需要期に入るため、前期より1割減になると予測され、前年同期比で減少の見通し。

#### (2) ニュージーランド・チリ材製材品 需要について

平成29年第3四半期の実績は、夏場の低需要期ではあったが、9月以降はチリ材製品の入荷遅れによる不足分を内地挽き製品が補完する形で荷動きも回復し、前回予測より増加となった。

第4四半期の見込みは、遅れていたチリ材製品が短期間に複数船入荷となったが、好調な輸出に支えられ10月以降需要が増加しており、前回予測より増加の見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、3月末の企業決算を控えた最終需要家からの梱包需要が伸びる繁忙期であり、需要は堅調に推移すると予測し、前期と同程度の見通し。

第2四半期の見通しは、例年の低需要期に入るため、需要は前期より1割減になると見通し。

### 15. 米材、欧州材、北洋材、輸入集成材の供給動向

#### (1) 米材丸太供給について （資料10 - P2）

平成29年第3四半期の実績は、前年同期比で増加となった。

第4四半期の見込みは、北米需要が強く、輸出向け原木供給のタイト感が残るため、前年同期並みの見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、降雪等伐採活動に影響を与える天候の不安もあるが、内外からの強い需要もあり、前年並みの数量が予想されるが、前年同期比で減少の見通し。

第2四半期の見通しは、前期の降雪による伐採活動の低下が無ければ、前年同期比で増加の見通しであるが、冬季の降雪次第では予想数量より落ち込む可能性がある。

## (2) 米材製材品供給について (資料10 - P2)

平成29年第3四半期の実績は、米国市況が好調なことにより前年同期比で減少。特にヘムロックは1-10月-19.8%となった。

第4四半期の見込みは、前期同様、米国市況の好調が影響し前年同期比で減少の見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、買い難い状況が継続されると予測され、主要樹種SPF、ダグラスファー、ヘムロック共に高値オファーにより数量は低調で、クリスマス休暇の影響もあり前年同期比で減少の見通し。

第2四半期の見通しは、例年第2四半期は春需要、天候も回復する事より前期より入荷は増えることが予想されるが、前年同期比では、減少の見通し。

## (3) 欧州材製材品供給について (資料10 - P2)

平成29年第3四半期の実績は、第2四半期の成約までは順調な需要、為替も円高である程度進んだが、5月前後コンテナ不足が深刻化した。前年同期比で増加したが、若干船積みもずれ込んだ内容と思われる。

第4四半期の見込みは、例年10月入荷は現地夏休みの影響で大幅な入荷減少となるが、本年はコンテナ不足で遅れていた船積みが回復に向かい、10%以上は多くなっている。第3四半期の交渉が、後半より急激な円安傾向となり採算悪化したが、交渉スタート時の勢いで従来並みの数量は成約しており、例年よりは多めの入荷となり、前年同期比で増加の見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、買付を抑えた事により前年同期比で減少の見通し。第4四半期の買付は、中国を筆頭に現地価格も強含み傾向の中、日本は円安、国内相場の値上げ見込みも不透明で、特に羽柄材、ホワイトウッドラミナの買付を極力抑えた。

第2四半期の見通しは、第1四半期の交渉が、世界市場も引き続き悪く無く、一方日本は円安、不需要期に突入、コストをカバーするために相場値上げ出来る程の力強い需要も見込めず、数量確保・価格交渉難航で買い付け数量は低調となり、前年同期比で減少の見通し。

## (4) 北洋材丸太供給について (資料10 - P4)

平成29年第3四半期の実績は、カラマツ中心の需要に対して、伐採林区の植生樹種に偏りがあり(エゾ松が多かった)、十分な供給余力が無かったため、前年同期比で減少となった。

第4四半期の見込みは、伐採林区の植生の問題と、伐採活動の端境期でもあり、前年同期比で減少の見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、伐採林区の植生の問題と、伐採活動の端境期でもあるが、前年同期と同程度の見通し。

第2四半期の見通しは、前期より生産量は多少増加すると思われるが、前年同期比で減少の見通し。

## (5) 北洋材製材品供給について (資料10 - P4)

平成29年第3四半期の実績は、港頭在庫が多く買い控えとなったことから、前年同期比で減少となった。

第4四半期の見込みは、端境期で、例年入荷減となるため、前年同期並みの見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、出材期で、対日価格が悪く無いこともあり、前年同期比で増加の見通し。

第2四半期の見通しは、出材期でもあり前年同期並みの見通し。

## (6) 輸入構造用集成材供給について (資料10 - P7)

平成29年第3四半期の実績は、旺盛な需要を反映し第2四半期の買付が順調で、入荷も多めとなり、前年同期比で増加となった。

第4四半期の見込みは、例年10月は夏休みの影響で入荷減となるが、コンテナ不足解消で契約残の船積みが進み、大きな落ち込み無く入荷し、11、12月も入荷は高水位順調と予測され、前年同期比で増加の見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、第4四半期は円安傾向であったが、引き続きレッドウッド梁の需要は旺盛で、ホワイトウッド柱はスギ管柱の影響で買付数量が押えられた。ホワイトウッド柱減、年末年始休暇、冬時期生産を考慮し、前年同期比で減少の見通し。

第2四半期の見通しは、第1四半期の交渉は円安、不需要期と初めて悪材料が露呈するが、急激な買付ストップも出来ず、またポーランドの工場も出荷が軌道に乗り始めるため、前期に比べ増加すると予測される。

## 16. NZ・チリ材の供給動向 (資料10 - P5)

### (1) ニュージーランド・チリ材丸太 供給について

平成29年第3四半期の実績は、前年同期の入荷が低水準であったため、前年同期比で大幅な増加となったが、ほぼ需要に見合う入荷量であった。

第4四半期の見込みは、各社の買付状況から判断し、前年同期比で減少の見込み。平成29年全体の入荷予想は393千 $m^3$ となり、年計では、ほぼ需給が見合った状態である。

平成30年第1四半期の見通しは、平成30年の上半期入荷予想を180千 $m^3$ と予想し、第2四半期は梅雨前にあたり、入荷減になるため、前倒しで第1四半期にやや多い入荷が予想され、前年同期比で増加の見通し。

第2四半期の見通しは、梅雨前に若干入荷減になることが予想され、前年同期比で減少の見通し。

### (2) ニュージーランド・チリ材製材品 供給について

平成29年第3四半期の実績は、チリ4番船、5番船が10月にずれただため、前年同期比で減少となった。

第4四半期の見込みは、前期の4番船、5番船が遅れた分が入荷となったが、11月末のチリ港湾ストライキにより、10千 $m^3$ 程度が1月にずれただため、前年同期比で減少となる見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、前期要因の通り、ストライキの影響で本来2017年第4四半期に入るものが遅れて入荷したため、前年同期比で増加の見通し。NZは原木コストが高く、内地材に需要を食われ、年間55千 $m^3$ と前年比10%減と予想。チリは大手2社による寡占状態、価格対応力もあり年間270千 $m^3$ と2016年並を予想。

第2四半期の見通しは、第1四半期が増えた分第2四半期で平準化されると予想され、前年同期比で減少となる見通し。

## 17. 南洋材丸太(製材用)、南洋材製材品の需要動向 (資料10 - P3)

### (1) 南洋材丸太(製材用) 需要について

平成29年第3四半期の実績は、前年同期並みとなり、供給に見合った出荷となった。

第4四半期の見込みは、9月の丸太入荷が多く、10月出荷5,757 $m^3$ (前年同月比158.6%)となったが、10月は入荷が少なく、供給に見合った出荷になると予想され、前期並みの見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、現地の環境規制強化、伐採増税等による原木出材不足が続くことが予想され、前年同期比で減少の見通し。

第2四半期の見通しは、前期要因により、前年同期比で減少の見通し。

## (2) 南洋材製材品需要について

平成 29 年第 3 四半期の実績は、住宅着工数は前年並みにあり、実需は見られたが、非住宅関係の動きが鈍く、前年同期比で減少となった。

第 4 四半期の見込みは、10 月出荷 44,987 m<sup>3</sup>（前年同月比 117.8%）となり、住宅着工は減少傾向がみられるが、非住宅及びリフォーム物件で動きが感じられ、前年同期並みの出荷が予想される。

平成 30 年第 1 四半期の見通しは、年度末竣工の案件が多く、住宅・非住宅含め、底堅い需要はあると思われ、前年と大きな実需の差はないと予想され、前年同期並みの見通し。

第 2 四半期の見通しは、住宅着工の大幅増加も期待しにくく、オリンピック関連含め、非住宅の動きはあると思われるが、第 2 四半期での動きは多くないと予想され、前年同期並みの見通し。

## 18. 南洋材丸太（合板用）の需要について（資料 10 - P3）

平成 29 年第 3 四半期の実績は、針葉樹合板へのシフトの進行、産地価格の高止まり、産地のインド・中国市場等へのシフト、産地の違法伐採対策等環境問題の影響、設備投資による国産材針葉樹合板の生産能力のアップ、南洋材取扱工場の減少等により前回予想並みの数量となった。

第 4 四半期の見込みは、前期要因の加速化、生産現地の天候不良による出材の減少等により、前年同期比で減少の見込み。

平成 30 年第 1 四半期の見通しは、前期要因により前年同期比で減少の見通し。

第 2 四半期の見通しは、前期要因はあるが、現地の出材増加への期待もあり、前年同期並みの見通し。

## 19. 国産、輸入合板の需要動向（資料 10 - P6）

### (1) 国内製造合板需要について

平成 29 年第 3 四半期の実績は、前年同期比で増加した。大手ハウスメーカー及び大手プレカット工場とも比較的旺盛な住宅受注から、仕入れ量は増加した。中小工務店・ビルダー向け受注残は流通店倉庫への納入が進んだ。

第 4 四半期の見込みは、前年同期比で増加の見込み。中小工務店・ビルダー向けでは、引き合いが落ち着き、大手ハウスメーカー、大手プレカット工場では引き続き好調に推移する。またフローリング用針葉樹台板の需要は、増加傾向は継続している。針葉樹構造用合板の通常品の需給バランスはとれているが、特寸や実加工品は特に納期を要する状況となっている。加えて年末のトラック確保の困難な状況も、納期遅延の一因となっている。

平成 30 年第 1 四半期の見通しは、前年同期比で増加の見通し。針葉樹構造用合板は、中小工務店・ビルダーでは、需要変動をみながらの手当てとなるが、大手ハウスメーカー並びに大手プレカット工場では仕入れ量の水準は維持される。全体では、前年水準の住宅着工数予想により需要は維持される見通し。

第 2 四半期の見通しは、前年同期比で増加の見通し。針葉樹構造用合板需要は、住宅着工需要などは販売状況との睨み、非住宅用は引き続き増加、全体では前年水準を上回る見込み。一方、針葉樹合板の需要用途拡大に対応する生産体制では、4 月に三重において月産 6 千 m<sup>3</sup>の生産拠点の稼働が予定され、複合フローリング用台板など広がる需要を支えると期待される。

### (2) 輸入合板需要について

平成 29 年第 3 四半期の実績は、マレーシア・インドネシアの丸太の出材不足を理由とする契約残の現地生産の未消化から、供給量とともに出荷も制約され、出荷量は前年同期比で若干減少となった。

第 4 四半期の見込みは、7/1 以降伐採丸太を対象としたサラワク州のティンバープレミアムの税率引上げによる丸太出材不足の中、駆け込み発注分などが今四半期に遅れて入荷すると予想される。しかし、製品アイテム別では、塗装型枠合板や薄物・中厚合板などの品薄状態は解消されておらず、現地生産も丸太不足から単板選別は構造用・生型枠用が優先となり、薄物・中厚合板の不足は続く見込み。今四半期も品薄なアイテムの引き合いは続き、需要は衰えない。出荷量は、前年同期で増加する見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、供給は、ベトナムテト・中国正月の季節的影響により前年同期比で減少となる見込みだが、南洋材フロア台板や薄物・中厚合板の根強い一定の需要は継続するため、供給を上回る需要になると考えられる。

第2四半期の見通しは、前期より増加し、前年同期と同程度の見通し。供給面では、3月頃見込まれる雨期明けによる現地の丸太の出材不足状況の回復により、遅れていた供給が通常状態に戻ると予想されている。そのため床暖房用フロア台板や薄物・中厚合板など、国内産合板で容易に代替できないアイテムの底堅い需要に応じてゆくものと予想される。

## 20. 南洋材、輸入合板の供給動向

### (1) 南洋材丸太 供給について (資料10 - P3)

平成29年第3四半期の実績は、年末の供給減に備え多めに発注した結果、前年同期比で増加した。

第4四半期の見込みは、産地の集材が不十分のため、前年同期比で減少の見通し。

平成30年第1四半期の見通しは、例年、この時期は産地が雨期に入り、旧正月の影響で入荷量は少ない。産地手当が難しくなることが予想され、前期より減少の見通し。

第2四半期の見通しは、同時期の内地需要は45千 $\text{m}^3$ と予測するが、第1四半期が少なかったため、若干多めの入荷が予想され、前年同期比で増加の見通し。

### (2) 南洋材製材品 供給について (資料10 - P3)

平成29年第3四半期の実績は、原木伐採税アップによる伐採低調に加え、インド等他のマーケットの好調により対日向け数量は減少し、前年同期比で減少となった。

第4四半期の見込みは、前期要因により、日本向け数量の回復は期待薄く、前年同期比で減少の見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、前期要因により、前期と同程度の見通し。

第2四半期の見通しは、前期要因により、前期と同程度の見通し。

### (3) 輸入合板 供給について (資料10 - P6)

平成29年第3四半期の実績は、中国の環境規制の影響により前年同期比で減少となった。

第4四半期の見込みは、マレーシアを中心に原木不足が表面化したことにより日本からの駆け込み契約が増加し、前年同期比で増加の見込み。

平成30年第1四半期の見通しは、異常気象、RKT（インドネシアの年間原木伐採許可量）の更新により、原木不足は今以上に深刻化、また中国旧正月、ベトナムテトの影響で中国、ベトナム合板は大幅に減少すると予想され、前年同期比で減少の見通し。

第2四半期の見通しは、天候の改善、RKTの更新も終了し、順調に原木が入荷されると予想され、前年同期と同程度の見通し。

## 21. 国内製造合板 供給について (資料10 - P6)

平成29年第3四半期の実績は、堅調な住宅着工、国内合板工場のフル稼働、輸入合板の減少傾向、産地の違法伐採対策等環境問題の影響、フロア台板用国産材合板の需要増大、設備投資による国産材合板の生産能力・効率のアップ等の理由により、前年同期比で増加となった。

第4四半期の見込みは、前期要因により、前年同期比で増加の見込み。

平成30年第1四半期及び第2四半期の見通しは、前期要因により、前年同期比で増加の見通し。

## 22. 集成材に関する動向及び国内製造構造用集成材の供給動向 (資料9、資料10 - P7)

平成29年第3四半期の実績は、堅調な需給が長く続いており、輸入ラミナの値上がり等もあり、秋需を見こした在庫積み増しの動き、新規工場等の本格的な稼働などもあり、前年同期比で増加となった。前



年同期は、需要の回復が見られた時期であるが、今年度は、堅調な需給が引き続いており、非常に高いレベルの生産量となった。

第4四半期の見込みは、管柱と平角で引き合いに差が出ているが、第4四半期に入っても需要は堅調である。12月に入り生産量は落ち込む予想であるものの、第4四半期総体として、生産量は高水準を見込めるものと想定され、前年同期比で増加の見込み。ラミナの値上がり、ユーロ高によるコストを埋める価格の値上げがなかなか通りにくい状況にある。

平成30年第1四半期の見通しは、例年1月、2月は需要が盛り上がり、生産日数も少ないため、他の期と比べ生産量は落ち込む傾向にある。前年の堅調な需給状況が、大きく変わるとは想定されにくいですが、前期より、減少の見通し。

第2四半期の見通しは、平成29年まで続いてきている堅調な需要の変わり目はいつ来るのか想定されにくいですが、生産水準も高くなっており、前年同期と同程度の見通し。